

平成25年度修士論文概要

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 安藤, 有平, 板垣, 萌乃香 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/37497

「マクタガートの時間の非実在性証明について」

安藤 有平

概要

本論文はマクタガートが“The Unreality of Time”, (*Mind* 17, 1908)において主張する、時間の非実在性証明を重要なテーマとして取り上げ、最終的にその証明が失敗に終わっていることを示すものである。

1章ではまず、時間が「量」と「持続」という二つの側面をもつことを指摘し、それぞれに対応するものとしてアリストテレスとフッサールの議論を取り上げ、紹介した。2章ではマクタガートの時間論のうち、時間の非実在性証明に取り掛かる前までの段階、すなわち A 系列（過去／現在／未来）と B 系列（より前／より後）という定義を用いた時間観について説明した。変化を説明できなければ時間にとって十分な説明ではないため、変化を説明できない B 系列よりも A 系列のほうがより基礎的なものであることになる。A 系列的特徴（A 特性）によってもたらされる変化こそ唯一の変化であるため、A 系列なくして時間はありえない。変化が時間にとって不可欠であるということについては、3章でより深く考察した。

4章ではマクタガートの時間論の後半部分、時間の非実在性証明について説明した。時間の中にあるものはすべて、現在、過去、未来のいずれかひとつだけでなければならず、複数を兼ねることはできない。しかし、あらゆる出来事はこれら三つの性質をすべてもつことになる。ある出来事 M が過去であれば、M は未来、現在であったのだし、M が未来であれば、M は現在、過去になるだろうし、M が現在であれば、M は未来であったし、過去になるだろうためである。三つの A 特性は両立不可能なものであるにもかかわらず、出来事はそれらをすべてもたねばならない。それゆえ A 系列は矛盾しており、存在できず、したがって時間もまた存在しないのである。出来事は三つの A 特性を一挙にもつのではなく、未来→現在→過去の順番でもつのだから両立は可能であるという反論をマクタガートは二つの理由から退ける。第一に、A 系列が矛盾しないことを証明するために時制表現を用いることは、時間の存在を証明するために前もって時間の存在を前提することに等しい。第二に、出来事が三つの異なる時点においてそれぞれの A 特性をもつとしても、それら三つの時点もまた三つの A 特性をもつことになるため、A 系列の矛盾は引き継がれ続け、解決されないのである。

証明の最終ステップにある、「時間が存在しない」から「時間が実在しない」を導出する部分については、5章でマクタガートによる実在の定義を確認することによって説明した。6章では、A 系列が含む矛盾が保存されず、そのつど解決されていると指摘することで、マクタガートの証明を否定する。出来事が三つの A 特性をもつことを説明するには三つの異なる時点を導入する

ことで十分であり、それら三つの時点がそれぞれ三つの A 特性をもつことに対しても、やはりそれぞれの時点に対して新たに三つの時点を導入することで十分に説明される。この手続きは終わりなく続くが、それは A 系列が存在せず、したがって時間もまた実在しないことを示すものではなく、むしろ時間が究極的であることを示すのだと考えるべきである。

(金沢大学大学院人間社会環境研究科博士前期課程)

* * *

平成 25 年度修士論文概要 (人文学専攻・哲学)

「非道徳的価値の实在論は擁護できるか」

板垣 萌乃香

概要

正しさや不正さといった道徳的価値が、長い間に渡り哲学・倫理学における主要な議論のテーマとされてきた一方、非道徳的価値(道徳的価値以外の価値)がそれだけで注目されることは少なかったように思われる。その理由は、美しさや快さといった非道徳的価値は、一見したところ相対性を持つように思われ、したがってそれらの価値を説明するために非实在論あるいは非認知主義に抵抗する必要がなかったためかもしれない。しかし、非道徳的価値が一見したところ相対性を持つということをわれわれが認めているという事実は、非道徳的価値を实在論の立場から説明する道を断つものではない。本修士論文においては、非道徳的価値に関する实在論の立場が擁護可能であることを示すことを目的として考察を行った。

非道徳的価値に関して实在論の立場から与え得る理論については、道徳的価値の实在論についての議論を参照しながら吟味を行った。その際、それらの理論それ自体の妥当性に加えて、それらが、非道徳的価値がわれわれの日常経験において現われる際に持つと考えられる二つの特性を説明することができるかという点に照らして検討を行った。非道徳的価値が持つと考えられる二つの特性として、不一致の可能性と実践性という特性を指摘した。

はじめに検討されたのは、ムーアによって批判された定義を用いる自然主義の理論である。ここではムーアによる自然主義批判をめぐる議論を参照し、定義を用いた自然主義の理論は、その定義における定義項と被定義項との間の同一性をア・ポストエリオリに確かめることが可能である場合に限り主張可能であるということを明らかにした。同時に、ムーアが自然主義に代わる实在論として提起している非自然主義的な实在論の理論は不一致の可能性および実践性という特性のいずれも説明することができないということが明らかになった。次に、定義を用いる自然主

義を受け継ぐ立場として、還元主義的自然主義について検討を行った。その際、P. レイルトンが主張した非道徳的価値についての實在論の理論を参照し、レイルトンによる還元主義の理論は非道徳的価値判断が持つと思われる二つの特性を説明し得るということを示した。次に、定義に頼らない自然主義として非還元主義の立場からの説明について考察した。ここでは、D.O.プリンクによって提案された機能主義的な理論についての検討を通じて、この理論が、非道徳的価値が持つと考えられる二つの特性を説明し得るということを示した。

これらの考察の結果自然主義の側から主張される見解のうち、還元主義と非還元主義のそれぞれについて、それらが、非道徳的価値判断が持つと考えられる二つの特性を説明し得るということを確認することができた。しかし、本稿で明らかにすることができたのは、自然主義的實在論の理論が、非道徳的価値を説明する理論としてスタートラインに立ち得るということに過ぎない。實在論の立場を積極的に擁護するためには、それぞれの立場から与え得る具体的な理論の提案の他、非實在論の理論についてのさらなる検討が必要である。

(金沢大学大学院人間社会環境研究科博士前期課程)